



TITLE:

京大広報 No. 412

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 412. 京大広報 1991, 412: 127-132

ISSUE DATE:

1991-06-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209255>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 412

京都大学広報委員会

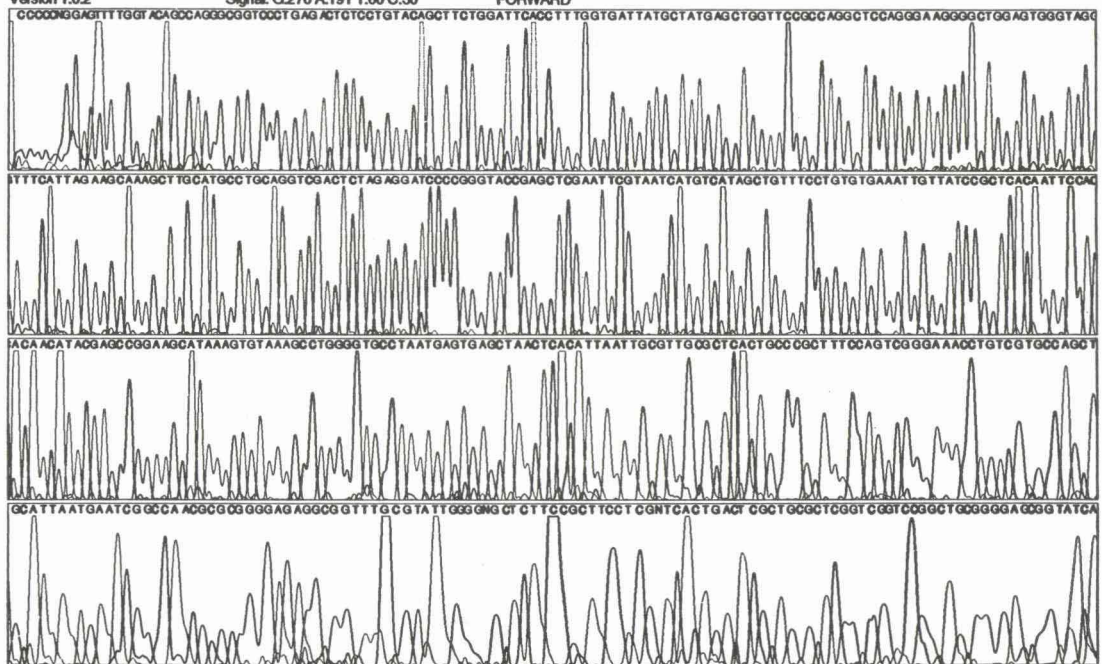
Applied Biosystems
Model 373A
Version 1.02

FUKITA22 09
Dye Terminator (Any Primer)
Lane 9
Signal: G:276 A:191 T:60 C:30

Points 705 to 7936 Base 1: 705
216 MATRIX FILE
P12
FORWARD

Sat, Dec 22, 1990 0:23
X: 0 to 8684 Y: 0 to 1200

Page 1 of 2



DNA 塩基配列自動解析装置を用いて決定した塩基配列の一例 ー関連記事本文 130ページー

目 次

<大学の動き>

- 外国人留学生歓迎パーティ..... 128
- 樋口隆昌名誉教授、沼 正作医学部教授が
全米科学アカデミー外国人会員に選ばれる..... 128
- 部局長の交替等..... 129

<紹介>

- 遺伝子実験施設..... 130

討 報..... 140

日 誌..... 140

<コラム>

夢コレクション part 1

薬学部教授 米田 文郎..... 141

＜大学の動き＞

外国人留学生歓迎パーティ

本年4月に入学した外国人留学生の歓迎パーティが、5月27日（月）午後6時から、京大会館において開催された。

歓迎パーティは外国人留学生、関係部局長及び指導教官等約150名が出席して行われた。西島安則総長の挨拶に続いて、岩井 保学生部長の発声による乾杯でパーティが始まり、新入留学生のスピーチなどを交え、終始なごやかな雰囲気の中に進められ、午後8時頃閉会した。

なお、新規の外国人留学生の内訳は、次のとおりである。また、本学の外国人留学生の総数は、770名である。（平成3年5月1日現在）

国 名 等	学部	大 学 院		研究生 研修員 聴講生	計
		修士 課程	博士 課程		
イ ン ド			1	1	2
インドネシア	1				1
韓 国			2	16	18
シンガポール	1				1
タイ	2		1	1	4
台湾			3	4	7
中華人民共和国	7		2	22	31
パキスタン			1		1
フィリピン		1		1	2
ベトナム				1	1
マレーシア	2				2
イ ラ ン			3		3
ケ ニ ア			1		1
ス ー ダ ン		1			1
タンザニア			1		1
モ ロ ッ コ			1		1
アメリカ合衆国		1		1	2
カナダ				1	1
パ ナ マ				1	1
メ キ シ コ				1	1
アルゼンチン				1	1
ブラジル				4	4
ソ 連				1	1
フランス				3	3
フィンランド				1	1
ド イ ツ	1		1	11	13
計	14	3	17	71	105

（注）国名等は通称による。

（学生部）



樋口隆昌名誉教授、沼 正作医学部教授が米国科学アカデミー外国会員に選ばれる

樋口隆昌名誉教授、沼 正作医学部教授が、1991年4月30日付けで米国科学アカデミーの外国会員に選ばれた。

以下に両氏の略歴、業績等を紹介する。

樋口隆昌名誉教授



樋口隆昌名誉教授は、昭和2年岐阜県に生まれ、昭和25年名古屋大学理学部生物学科を卒業、岐阜大学農学部助手、講師、助教授、教授を経て、昭和43年京都大学木材研究所（現木質科学研究所）リグニン化学研究部門教授。この間、

昭和53年5月から同59年5月まで及び昭和63年4月から平成3年3月まで木材研究所長を務め、平成3年3月停年退官後、本学名誉教授の称号を授与され、現在日本大学農獣医学部教授である。

同名誉教授は、木材化学で重要な位置を占めるリグノセルロースの基礎生化学的研究分野において数多くの独創的な研究業績を挙げ、この分野の学術の進歩・発展に尽くされたが、特に、「リグ

ニンの生合成と生分解の酵素の機構」に関する研究は、国際的に高く評価されている。すなわち、リグニンが糖やアミノ酸を経て植物細胞壁に蓄積される反応経路を解明すると共に、針葉樹型リグニンと広葉樹型リグニンの生合成の差異を決定するメカニズムを解明した。一方、生分解研究においては、リグニン分解酵素による一電子酸化機構の解明に貢献した。

これらの業績に対し、日本林学賞並びに紙パルプ技術協会賞（昭和34年）、林業科学技術振興賞（昭和43年）、日本農学賞（昭和60年）、日本人初のアメリカ化学会 Anselme Payen 賞（昭和60年）等を受賞。昭和62年、グルノーブル大学理学・工学・医学名誉博士の学位を授与された。

同名誉教授は、「リグニン生分解研究」に関する日米国際科学セミナーを企画・実施し、この分野の科学技術の国際交流に尽力された。

長年にわたる同名誉教授の教育研究活動の功績に対して、平成2年秋、紫綬褒章が授与された。現在、国際木材科学アカデミーの会長としても活躍されている。（木質科学研究所）

ンネルを代表するニコチン性アセチルコリン受容体、電位依存性イオンチャンネルである Na^+ チャンネルと Ca^{2+} チャンネル、G蛋白共役受容体であるムスカリン性アセチルコリン受容体など、それぞれ進化的に近縁の数群の受容体及びチャンネル蛋白の一次構造を明らかにした。さらに相補的 DNA の人工的改変と発現及び電気生理学的、薬理的、生化学的解析方法を併用することにより、チャンネル形成部位や電位感受部位の同定など、神経伝達物質受容体及びイオンチャンネルの機能の分子的基盤に関する重要な発見をした。

なお、同教授は Heinrich Wieland 賞、朝日賞、日本学士院賞、Otto Warburg メダル、F. O. Schmitt 神経科学賞等を受けており、またバイエルン科学アカデミー、アメリカ芸術科学アカデミー、王立協会、ドイツ自然科学者アカデミー Leopoldina などの会員でもある。

（医学部）

部 局 長 の 交 替 等

沼 正作医学部教授



沼 正作教授は、昭和4年和歌山県に生まれ、昭和27年京都大学医学部医学科卒業、京都大学医学部内科学教室を経て、同31年米国ハーバード大学医学部、同33年西独マックス・プランク細胞化学研究所に留学、同36年本学医学部医化学教室助手、同37年同助教授、同38年再びマックス・プランク細胞化学研究所に留学、同43年本学医学部医化学教室教授、同60年同分子医学系専攻分子遺伝学講座教授となり現在に至っている。

同教授の主要業績は、神経情報の伝達をつかさどる膜蛋白である神経伝達物質受容体及びイオンチャンネルの構造と機能に関するものである。すなわち、組換え DNA の手法をこの分野に導入することにより、神経伝達物質依存性イオンチャ

ヘリオトロン核融合研究センター長

大引得弘ヘリオトロン核融合研究センター教授（超高温プラズマ制御研究部門）が5月29日ヘリオトロン核融合研究センター長に再任された。任期は平成5年5月28日までである。

食糧科学研究所長

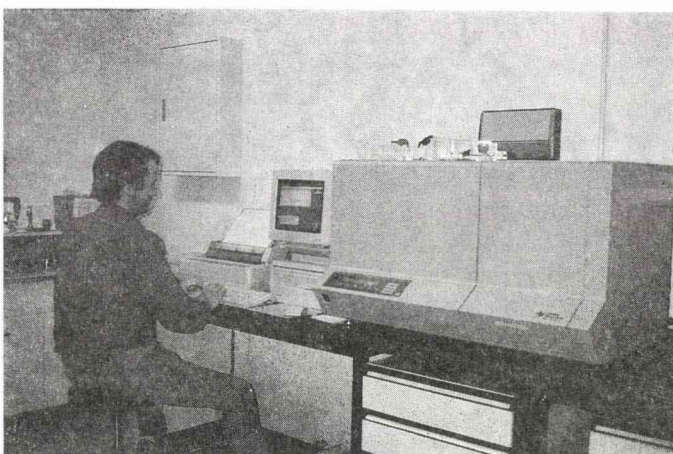
鬼頭 誠食糧科学研究所教授（たんばく食糧研究部門担当）が6月11日食糧科学研究所長に再任された。任期は平成6年6月10日までである。

< 紹 介 >

遺 伝 子 実 験 施 設

今日の生物学を考える時、遺伝子組換え実験（組換え DNA 実験）を抜きにして、生物学の発展を考えることは、ほとんど不可能である。組換え DNA 実験は、農学、薬学、理学、工学、医学の全ての生物学の分野にまたがり、その革新的な技術によって、生物学に産業革命をもたらしたとも言える。この技術は、修得が誰にとっても容易であること、またその結果が明快でかつ応用範囲が広いことから、生物系の学部学生及び大学院学生にとって、この技術の修得訓練は必要不可欠なものとなっている。

文部省は、1980年代の初め頃から全国の各大学に遺伝子実験施設を設立してきた。京都大学においては、本施設が吉田キャンパスに設立されるまでは、宇治キャンパスの化学研究所附属核酸情報解析



施設が、全学的な遺伝子実験のセンターとして機能していた。しかしながら、吉田地区の組換え DNA 実験に携わる研究者や学生の増加とともに、新たな施設を要求する声が高まり、遺伝子実験施設が、京都大学学内共同利用施設として1988年4月に発足した。当初は仮住まいであったが、1990年ウイルス研究所新棟の設立とともにその建物に間借りをするようになった。ようやく1991年夏には本施設の建物が着工される予定である。

この施設の特色は、これまで他学に見られなかったトランスジェニックマウス、すなわち、遺伝子を外から導入し、ネズミの形質を転換したモデル実験動物を作製・飼育する設備を備えていることである。この目的は、今後組換え DNA 実験を用いた遺伝病の解析と、それに関わるモデルマウスの構築が、生物学において中心的な役割を果たすであろうという設立当初からの発想に基づいて

いる。この施設の研究は、現在自己免疫疾患の病態原因解析、及び免疫不全動物突然変異マウスの原因遺伝子の究明など、マウスを用いた遺伝的疾患の原因究明に中心が置かれている。

また一方で、いわゆるヒトゲノムプロジェクトとして、ヒトの全遺伝子の解明を行い、国際協力によってヒト遺伝子地図を作製しようという試みが進行している。京都大学遺伝子実験施設においては、ヒト14番染色体にある、抗体H鎖遺伝子領域の全構成の解明に向けてこれまで努力しており、かなりゴールに近い時点まで進んでいる。今後はさらに、14番染色体にあるT細胞受容体遺伝子座との連鎖を含めた、大規模な染色体マッピング等などが考えられている。すなわち、遺伝病原

因遺伝子の解析とヒトゲノム解析とを二つの柱として、今後の研究活動が進展する予定である。

当遺伝子実験施設のもう一つの特色は、外国人客員教授のポストがあることであり、常に外国人教官が滞在し、若い大学院学生にとって

は大きな刺激を与えており、遺伝子実験施設は国際的な遺伝子研究のセンターとして、我が国を代表する地位をすでに固めている。完成予定の建物は、京都大学医学部附属病院西部キャンパスの中にあり、隣りに胸部疾患研究所、及びウイルス研究所、また生体医療工学研究センターなど、医学関係の研究施設が並んでいる。そのせいか、医学的な研究を志す人が集まって来ているが、医学はあらゆる生物学の総合的応用であるので、これは極めて自然な結果ということが出来る。また同じ建物の中に、ウイルス研究所の一部と医学部分子医学系独立専攻の講座が、同居するという新しい試みもされている。この建物は、玄関を入ったところに大きな吹き抜けのある京都大学にしては珍しくモダンな建物であり、研究者にとって、極めて快適な新しい研究施設の未来像としても注目を集めている。

（遺伝子実験施設）

計 報

本城 格 名誉教授

本学名誉教授 本城 格 先生は、5月27日逝去された。享年74。

先生は、昭和15年京都帝国大学文学部を卒業後、大学院を経て同16年京都帝国大学文学部副手、同18年第三高等学校講師嘱託、同21年京都帝国大学文学部講師嘱託、同23年第三高等学校講師、同年同高等学校教授を経て同25年京都大学助教授（吉田分校）に就任、同32年京都大学文学部に配置換、同44年文学部教授に昇任。同55年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。

本学退官後は、昭和55年から平成2年まで甲南女子大学文学部教授を務められた。

先生の専門は、フランス・ルネサンス期の文学、特にロンサールを中心とするプレイヤッド派詩人の研究、フランス語語彙論であり、これらの領域で優れた研究業績を残された。主な論文に「Ronsard 研究序説——恋愛詩集の用語と文体を中心にして」、共編著に『仏和大辞典』（白水社）がある。

これらの一連の研究活動、学術上の貢献に対し、昭和51年5月には、フランス国から教育功労勲章（Palme académique）オフィシエ章（Officier）を授与され、さらに平成2年11月3日には勲三等旭日中綬章を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（文学部）

日 誌
（1991年5月1日～5月31日）

- 5月7日 人間・環境学研究科入学式
- 10日 平成3年度京都大学職員研修語学研修（英語初級コース）第1日（平成3年8月9日まで毎週火・金曜日 総60時間）
- 15日 国際交流委員会
- 17日 アメリカ合衆国 Brown 大学 V. Gregorian 大学長他1名来学、総長及び関係教官と懇談
ク 総長、職員組合との交渉に出席
- 20日 放射性同位元素等管理委員会
京都大学春秋講義 月曜講義 第1日（以後の日程は、27日、6月3日、10日、17日）
- 21日 タイ国 N. Suntornpithug 教育省教員養成局長他13名来学、総長及び関係教官と懇談
- 22日 京都大学春秋講義 水曜講義 第1日（以後の日程は、29日、6月5日、12日、19日）
- 27日 学位授与式
ク 新入留学生歓迎パーティ
- 27～29日 平成3年度京都大学職員研修主任研修（第1回）
- 28日 評議会
ク 大学院審議会



